

腹腔鏡下胃切除術

一目でわかる術野展開とテクニック（第2版）

寺島雅典

静岡県立静岡がんセンター胃外科部長

腹腔鏡下胃切除術が平成14年に保険収載されて以来、症例数は年々増加傾向にある。先日実施された日本胃癌学会のガイドラインに関するコンセンサスミーティングのアンケートでは、胃癌手術を実施している施設の実に90%以上が腹腔鏡下胃切除術を既に実施しているか、近い将来に導入予定であるという結果であった。現在わが国で年間10,000例以上が腹腔鏡下胃切除術を受けていると推定されている。また、日本臨床腫瘍研究グループ(JCOG)では腹腔鏡下胃切除術の安全性を検証する臨床第Ⅱ相試験を実施し、安全性に問題がないことが確認されたため臨床第Ⅲ相試験に移行している。このように腹腔鏡下胃切除術は実地臨床としても臨床試験としても急速な発展を遂げている。しかし、実際に腹腔鏡下手術で多数の症例をこなしている施設はまだ少なく、多くの施設ではいまだ本格的な導入には至っていない。

その大きな理由としては、上腹部の解剖の複雑性に起因する手技の繁雑さや、切除後の再建術式の多様性などにより、腹腔鏡下胃切

除術では比較的高度な手術手技が必要とされることが挙げられる。腹腔鏡下胃切除を円滑に導入するためには、上腹部の解剖を熟知することと同時に、腹腔鏡下手術ならではのポイント、すなわちスコープを通して得られる術野の見え方、助手の効果的な術野の見せ方などについて習熟する必要がある。これまで、いくつかの腹腔鏡下胃切除術に関する手術書が存在したが、実際の術野の見え方や見せ方について記述したものはほとんど存在しない。これは学会のビデオなどを見ても同様であり、実際に腹腔鏡下胃切除を導入しようとする際に大きな壁に突き当たることが多い。

今回4年ぶりに大幅に改訂された本書は、手術の展開に応じた場面ごとに、近接した写真と遠景のイラストが提示されており、細かな解剖や手技を学ぶだけでなく、助手の右手、左手が具体的にどういった役割を果たさなければならないのかについても一元的に知ることができる極めて実戦的な手術書である。執筆陣はわが国(もちろん世界)の腹腔鏡下胃切除術

の第一人者たちであり、これから腹腔鏡下胃切除を始めようと考えている医師ばかりでなく、ある程度手術に習熟した医師にとっても非常に有用である。構成は郭清手技と再建手技、トレーニング法に分かれており、それぞれの術式ごとに記載されているので、自分の知りたい手技を確認する際にも容易に参照することが可能である。まさに、現時点での腹腔鏡下胃切除術の標準手術手技集といえる内容である。

また、本文とは別にコラムとして各著者の経験談やこだわり、豆知識なども掲載されており、普段学会などでもあまり聞くことができない情報を収集できて大変興味深い。

ともすればこういった先進的手術の分野では個人の技術の競合に陥りがちであるが、このような標準的手術手技の啓蒙に大きな貢献を果たしている関東腹腔鏡下胃切除研究会に敬意を表したい。

●B5/頁200/2010年/定価9,450円
(本体9,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-00998-0]
医学書院 刊